

田舎好人居忠臣藏 後編 上

^ 13
3720
3



13
 3720
 3
 巻



田舎芝居忠臣藏二編自序 師貞閣

藝食ふ蟲と己が好くくく入なうの。

八種能 解五美小織乃上菓子を嫌う。

山田文十箇二又名琉球茶也矮著菊瓜

少好む何事。二種系説神更小壁心。

讀本の上菓子あり。何ぞ一全傳と云う物。諸うどとす。

中山と駄菓子あり。戯作の根なりとて述べて
しつゝの世に柳駄菓子に戯作者。元祖
少母とていふ。相傳の製法はゆき世
風来紙を寫すより字相傳の製法はゆき世

を唐山と交係して母戯の字にせり
工夫を凝して可映とて表し。取次費の
外題学問甚博物のりして取次費のりし

と記す。陳奮漢文の子細らして羅賈
の國油を以てす。学問の儒者として
り。國學者の鋪をて開て大賈人

多むづり。本錢の爲におうけ
智慧が三文安賣れ駄菓子店を蓮葉
商。噓は俗物。噓は俗物。噓は俗物。

子の嘲と顧がふあひのるる一々戯作者

心才物納らちなる新製法あふと夢

食ふ蟲も好くは意年恒り初編

お報より再び着す第二稿お市也控漢

一叔の田舎芝居新様物もお芝居

とら。うらまゆふゆ月狂の上評判

ぶお需なふら。いお土着あり持母の母年

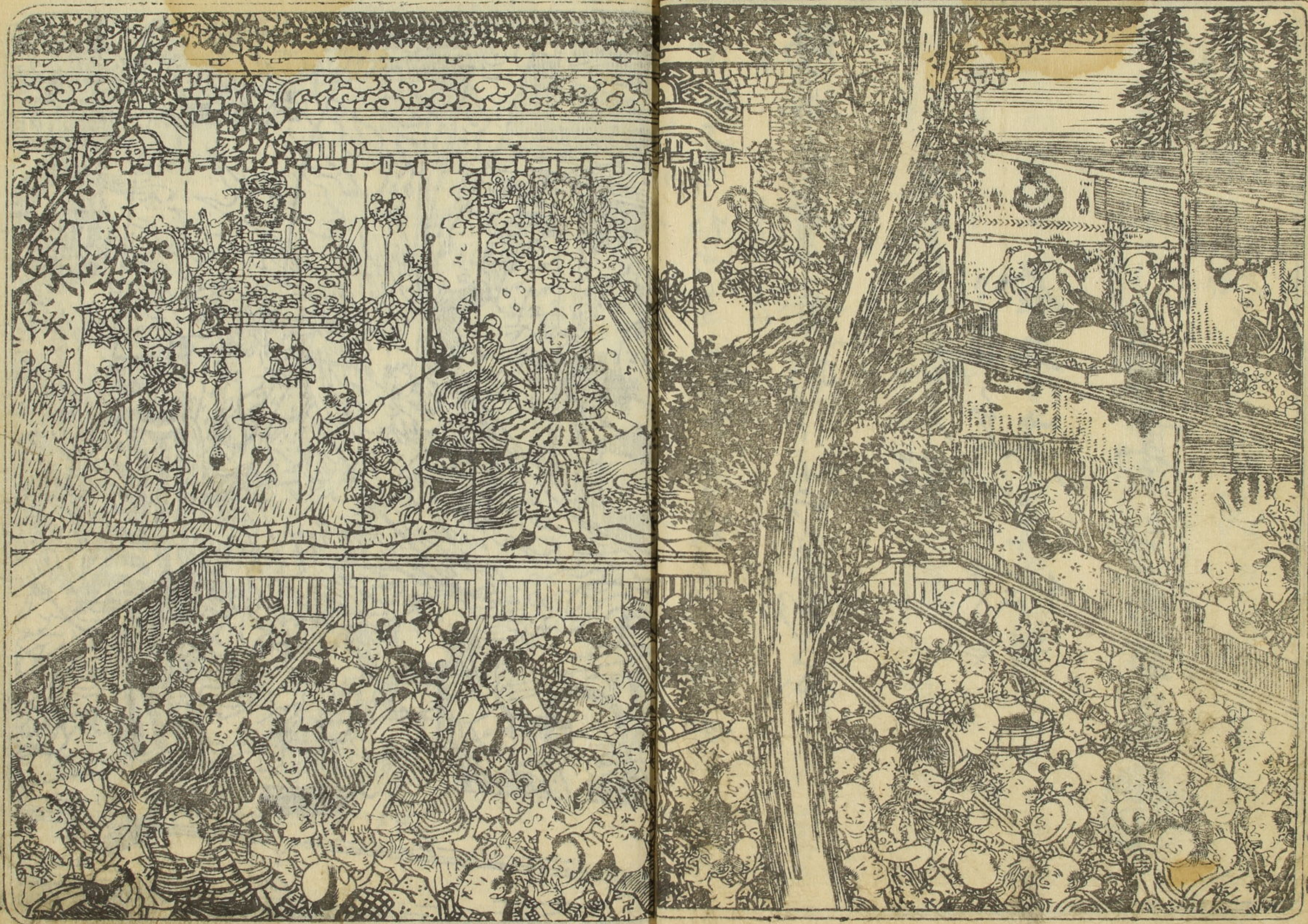
賜ふも讀母けととらふ。

し

金平本作者

式亭三馬戯題









古今亭三島

志あつ

田舎

芝居の

氣さ

い

救た

め

多

常

通亭三七

花道を

時

お

あ

山田の

四

幕



三笑 雑谷 芝居 赤の 義の 田 小 方 子 家 宗

七

四十癖

初編 二編 各編

人おろし... 初編 二編 各編

三 芝居 客者評判記

初編 二編 三編

忠臣藏偏癡氣論全冊

忠臣藏のわらわら... 初編 二編 三編

大子世界樂屋探

初編 人物の部

田舎芝居忠臣藏二編

二編と一編の... 初編と二編

江戸戯作者・式亭三馬戯編

三段目の幕畢てより。どのも... 見物の... 中賣の声と

僕小喧しく。速く... 喚び幕... 呼り。

掌と拍鳴らすと土棧敷の見物

賈人の声く。美濃の... 敵討の助

こー米やく

田舎芝居忠臣藏二編

おこ一米やあこ一米やありんをうやありんがうやと
お後ともやの字をつけて長程かゝるくよぶなり
「麦湯やく」茶飲つゝの

く「あつちのり」トのりいふ風をまゝにさかやくと
りてはるがねけるゆゑあつちのりといふなり
「ぶらちをき解やく」

あま川もち「稗園」ふやのろこ「園粉」濁酒やあまがけ「振」
のりまゝり

飯やく「米の飯の振」飯や「実の飯の振」飯や「砂糖」

園粉や江戸園粉「江戸法白や燗酒や江戸法白」
のまろくかんねくろ燗のがせうぎく「一盃で早酔」

徳用向のまろくかんねくろ「見おま太」
「三伯父」あけ「一盃長」

実の江戸諸白ごま「商人何」
「あんでちく」とぶんぬくべの新川

くら附出「ごま」馬の脊でりくごまく「くら酒か和く飲ら

「いら」商人「四十五文よ」商人「あふ」四十五文と馬麻はくで。

其「茶碗」あや「五文斗」遠入らう。け酒の安いふり「とまけ

「商人」一「壺切小切」さろく「かんま」一合入の茶碗ごま。に「ら

肉で飲むと「遠く」べい「芝居」ごま「くら高」のあも「らさ。

江戸へ往て「えんせ」指割百三十二文で一升「くら」看扱「ら

出て「居ら」に「ら」も「知居」べい「ら」蓋「くら」後「ら」で「毎」

ぶ。地酒「ごま」一合「十文」江戸諸白「ごま」一合「廿四文」蓋「くら

「商人」

店の飲酒のりまけふらふらくらの奴むしを公こうさまもア二十八文にんごらど
 蓋さんねいちろひいで買かいワいのとりま「あんどちとさんねい蓋さんねいちろひいどんごど
 買かいぶいがごうせうが。これい教しやるめんら。アい。雷らいこ提ていせめめ
とひ「あいんどいい蓋さんねい食じ酒じゆ市いちめが。おのいらが張込しいけく。
 あつまありみるかうま男おとこどごとあらまるこし。トとららんこもど誰たれ
と思おもつて嘴くちばしイいかんあらまるまらら孫まごが男をと見み損とつこえ
い「男おとこも見損とりぬけぬ。桐きり酒さけさあらら蓋さんねい擔たん桶づく甘あまいど
商「コい。上う草くさ坂さか村むらの挽十じゆきらちや。松まつ薪ぎんでいぶさる荒神あらいがみ

及およびや孫まごが煙ろつて男どごとよ「これいがけづらつて進すすむらや
 風かぜ下したの野火のびとも思おも孫まごくあんのこも男おとこづくちやあん
い。孫まごづくの倍どんべいの商人あまんとどう商あまんと人どの指ふ言ぶい「まいい
 つけづらつて。是これが是。裁あ後ごをへ物もの買かいふ付つきやあらまるこし切きり
小切こぎりイいせごうい小こ賣うり物もの買かいおぐら。トとららんこもど現げん金きんをけむし
商「賣うり物もの買かいおぐら。教しやどとままでこらんど現金げんきんをけむし
と看かん板ばんさあ孫まごくちどま芝あ居いの中なか賣うり小こ掛かをあらまるこし
あらまるめんど。あのいらがせく居で物を買いこらんアあらまるこし

こしきん 聴て呉せ。おの野郎らがくくくハテサウウウウウウ。さあ
 ちゅうりーせんま「操平もころちき来い。おんのえんごあーらっ。ら
 りげ新い志て孫小儀る時どろ。なああ止る。トあ方をしりけ
 浪風も「稗園まやゆらに園ま「ヨイ稗園まを呉せハア。
 トあまざしヤ。孫三のかきこる。よく見おふごぶうううう
 教どんで「ヤ。誰ごころうう。孫どの。早大庄をあやハ孫つけ
 中より「それさ。むをああきつこ「尻焼猿す。くく高ぐさの
 それ。孫あべの「孫い〜孫。あう〜あハ「まんごうて
 くれがてして

是賣おとと後食するのんご「まんごうて是こすけべの
 トのううさみや「ヤまの毒あや「えんご〜あいかとあ地ね
 一うすける 言がららとあうりさ宗十郎でも踏考でもなすのん
 で五孫「それさ。モ。玄十とあと後孫さあのおかたるんごさ
 おい戸の役者もかなひかきと「腕助どんのおうの別て
 形うごう「あんでもこくのおうるさうら旅さでよろけ
 モ 勘平ふらうくろ誰づるべの「新家の徳松どんさ「ああ
 うふ。あきが徳松どんう。白粉をささるささるささるさ

えんご。えんご。毒菴庵眼鏡くけて上根き根ふア幕斗
 えてみる。い幕も古の幕も予「菩提寺の先住の煩悩
 和尙さあのまき者であらざる時。今更の招ふ預以世功德
 下地狂言が有り共時和尙さあのが候義の土移さるるこひ
 ふとつて幕と製さるるこ是エそののむりの幕と代く作
 至物さ。雁金新田の絹衣の汶七どんが漆さるるぞ。えんご。
 いまふの地獄極楽の体相瓜色入小漆さけりやが。戸
 めも是れおどる職人さあんり。地獄極楽の体相と漆
 有まド

おの幕と他めやごごん移入先住さるるの夏さく
 残さるる道打さる地狂言のふふい幕さく「モ肉食
 寺で彼岸ふ拜さる中將姫のお曼荼羅のやア。い幕
 がありがてんご。又毒菴が候義とさるる毒菴「ホイちりつけさ。毒
 菴のめん中りさるるえんごのめんさるる。目録さるるあつこ
 とこ「ホイえりさるるやアなん移入。あじとあ目が移入をあり
 志てもさむが娘のおおまどりのさるる大城のお道具さるる。
 幕村のも用をさるるが能「目録さるる。そんなあをさるるいりりり

一かんふ。おぢまをアいらのうんざうを。目が糸雨で至極之疾小
 をらちりよ一あやのふ。ヨヤあつたまひ頃中で南条生ゆき引
 をらて婆さるの机中脊負きて居りけり。室子おるを事
 息。對人誰ごま一モのよ。五六きが舎子の五作と名を
 よ。一昨日の昼ごろけエ。ち左馬どんぐり往く。地狂言の敷
 倚合さるて居りけり。五作も来て居りけり。さうあるとお
 ぢまいめを。何おらどうえららてを。脊戸の糞
 溜の傍ふけらち居て言を悪つのかあどんと。あふり信

のうをまがら。あんどの揚あや。五作が方さ。あろラ。あろラ
 とするぞ。五作め。をわたせんをくまうさめんぞうらうら。
 ああも用も移くとふ。存りて縁側の外をけり。お
 ぢまよのふみす。糸ぎをきて臆を未申の方さふん曲らり。
 懐くう指二本出で。こらそ。こそとすぬをさるアまうらう。
 五作らが大勢の人の方さうらとより向ながら。眼で合点
 ぞ紙言してあつらひ。糸志うけを。あつらひ。そのるふを左馬
 どんと伴七と筆論の筆うら。ちのちやらちやのうら甲

ひろきまて うきうき 堪忍の四字を守居りて。あんまりてか
 らいなるア 気がつう移らうらつて。そあさうらさだらぬさ
 りつてええ入。先刻よりだまう 司孫さうどの堪忍の五字
 も。きりぎぬんぎの二字も 随分とあまのちやあけで。
 室さうらんま坊ふぢやアごらん移らまもまこらんふ
 横車へち移入のんでござるあんまりて入ば 非道
 ぞア 孫でも 非道でもござん移ら。ちや等が室筋
 へうらぶ 曾祖又後の代よ 普代女系のつごらんを子

ぞうらう。うらふ達らちやアあつるのあがる 淋移入。まが
 内の系圖帳あもあへべら。うらぶ内あもあつる道楽
 寺のま吉帳あもあへべら。あつる戒名の一紙紙くあへ
 あり。それいめのうらぶを移らあつてかいうふ早く来たてりて
 まがえへちやアさむりく 孫さどのまもよあ坊ふを
 えてあのをいりり一舟い大飯振舞のなを席くら遠へい
 ぞ。遊あぐな備あ入り中さ移入先入遠へいあこのあえ
 小居へいんぎさぞござらう。こらア悪あでござりやま 孫

悪所も魔もいらぬ。け村内でまらると孫を
 指折らよ。其中もまらると高うつらぬ。孫が
 家柄が悪い。孫をへん。弾たがら。お辯塔何代もかた
 ち舟べい。け村内。摩りての古系。今もあ村後退
 て浮くふらつて。隠居同船。口出。イセを居る分
 のる。まア。ごる。よ。ち。う。り。け。さ。る。者。ぢ。や。孫。
 うらが村後。あ。ま。り。あ。や。あ。ぶ。る。が。あ。る。あ。泥。鯨
 や。教。苑。が。陸。と。跳。あ。る。や。う。勝。行。壁。が。こ。ら。り。目。ら。り。趕。て

歩の。テ近の。まらぬ。道楽寺。正月
 年あり。あも。あ。ら。が。著。を。孫。へ。向。へ。屋。の。七。と。進。ど。の
 でも。新田の。勘。右。でも。足。津。屋。でも。一。番。計。程。の。祝。儀。の
 蓋。さ。なら。も。あ。ける。こ。う。ア。な。ん。孫。へ。テ。サ。代。く。居。士
 代。く。大。姉。の。家。柄。が。一。代。く。居。士。でも。九。年。あ。大。姉
 でも。貪。着。ア。ご。ざ。ん。ね。ん。そ。り。や。ア。を。あ。坊。あ。し。時。あ。は。依
 うら。家。柄。も。の。り。ま。ま。い。今。も。い。あ。る。こ。う。ア。遊。所。が。あ。
 ま。ら。て。え。づ。う。の。早。く。来。て。前。の。方。へ。遠。入。こ。が。能。さ。

田舎の二編

上三

家柄でも稗売でも金がなうまうてあんなふさふさのりんご。
 豆売格でござる。それらの役もうまうべい。まが又家柄くせ
 言バ土校あふるこころでござん様へ。アッせえ。辨塔校あ
 の一番が流をまする。それう肉食寺の和向さる。それう
 毒菴あけ三人のあつりも威勢がううう三番までたむ。
 そのあつり流紙や花苾や大風呂あまぐ向くふ
 上校あまうさる。そんなあ歴くござる。ふさふさの家柄
 と言バあの辺に紙あまうが能さうらと。同指ふ土校あふ

あつりござる。あつりござる。あつりござる。あつりござる。あつりござる。
 のの候あまうあれね。後ござる。豆売の格あつり。あつり。あつり。
 がらくで。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。
 小ん孫が能志し。吹売の用公さる。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。
 ちよぶら。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。
 がらく。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。
 作男を忌ぐる。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。
 つゆりんで。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。あつり。

まん後一だら誰だれもくあ世せ活くわよあるでも後ごが家柄いけがらが日ひ
 かんべい金かね豆まめのちやア人ひとが頭づを下さら。道楽どうらく寺てらの
 一番いちばん汁粉じゆふと人ひと後ごよ喰くと雨あめが。あやうふ食くべ能えよさ。
 まも辛抱しんぱうして金かね子のるちの孫ひま其そのさ金かねくが突つきづら
 いりよ一だら聴きづらら耳みみいあつふさげ。えづららら芝居しやいイ
 んるよ。眼まなこりらん後ごがう居ゐらさる麻あしくし。どうりら
 彩いろりよと。アめら堪かん忍にんの四よもまわりくさくありこそ。
 どうちうらえをれおれ。トたてひびきまうてぎりりやア勢せとび
 へて双ふたふとさづりらわがこれあやむ

▲十四五しよごのころちライ言い早はやさあ。うらうが隣となりのちんらさあをよんで
 らさうら一ちや後ごど動うごちら。けびらうらうら。ちんらららら
 ざら楽屋がくやへいげエ。お役者やくしやさ。ちんらも高師たかしのう真ま言い一ちや楽屋がくや
 の這入こりこりの庫裏くらごんべいの言いサ一ちや庫裏くらの錠じやうをあらして
 ちあ入いれ後ご一い言いんざら外そとらうかなさ。若わ又またちんら門かどで
 聴きざら。師しとん。師しとんちんちんて喰くをれエ。け調てう市ちら。面めんの
 面めん顔がほ斗とちうて働あつの後ご入いれサ一ちや夫つまを云いとと能え
 るぞトめ▲おらう拍子しやうし本ほんいころちうて肩衣かたぎぬをうりひらけら口上の役やく人ひとち
 りちらんちのぞふ幕まくらをあげてひらうとさ出いけつさうとす

飲食くわんじしく働たくらげとらてり。猫ねこ茶ちや村むら傘かさ屋や下げ駄だ花はなさるの
比ひ隠かく居ゐさるより。絞しぼの本ほん綿めん裁ざい二に之し尺せきおる役やくの玄げん十じふ
段だんの腕うで袖そで一いつ尺せきさる。むむ之し筋すぢづづあるより。五ご寸すん紙し片ぺん
禪ぜんあてもあるとらてり。道だう樂らく寺じの和わ尚しやうさるより
温うん純じゆんの粉こな一いつ袋たい。ああぎぎどどくく袋たいさるへへとらる。是こゝをを面めんへへ色いろ
とらてり。上じやう草そう坂さか村むら下げ草そう坂さか村むら洗せん栗り村むら蜂はち谷や村むら龜かめ
高たか村むら右みぎ五ごヶヶ村むらののいい志しよよ指さし方かたより。麦むぎ一いつかかままとと大だい豆づ
五ご升しやう。臭くさやのむら鱒ますの干ひかり魚いし二に十じふ枚まい師し直ちやう役やくののささんんく

下したさる。疝せん氣き後ごををよよしてしてかかははいていて狂くる言ごんささおおりりとらてり。隣りん村むら
肉にく食じき寺じの和わ尚しやうさるより。白はくいい線せん香かう三さん把ぱ五ご種しゆ香かう清せい明めい香かう
二に袋たいづづ。かかををよよ役やくのの内ない義ぎとと出で下したさる。衣い装しやう舟ふね衣い着ぎをを
ふふままととべべろろとらてり。ああららぎぎととららははららちち。帯おび村むら毒どく菴あんさるより。本ほん天てん藜れい參さん
かんかんぶぶららううふふららのの色いろももどどもも下したさる。これこゝへへ腰こし紐ひもららでも
發はつららううばば春はるとらてり。おおららどどくく純じゆん玉ぎよく湯たう五ご彼べ若にわか女むすめ形かたち
どもどもししららるるのの血ち暈うんでもでもああららててるる。ままととぐぐふふ用もちららとらてり。
ああぎぎおお娘むすめののかかみみ加かままささるるより。藍あいの紙がみ一いつ枚まいとと紅べに油あぶら一いつ貝かい

用...

あり申さる。あつらふが二人出て、幼平を引たりださす。
 又伴内と幼平の立の内がより。ちと腹筋をけけ。
 幼平の扱がけたなり。六年礼の雇着黨とり入形ど。
 後、紙紙であて。ちよいと張付さす。さささ身がり入
 納直、筆を持て物中とらひ。さささ。坐るく。成春加ふ
 ち。けあさる。とり。身ど。青黛と月代入。あまら。さ。り。が。
 揚幕。う。出。揚。小。鉦。香。の。は。の。あ。ま。ざ。れ。が。あ。つ。り。と。
 あつらふの生中が。鉄炮。後。小。さ。つ。こ。内。と。妙。ご。ス。お。か。る。が。

三人で、おとどりのふたると。裾が。お。前。も。ご。う。う。生。い。思。な。毛。む。く
 ぢ。や。う。の。臍。を。か。の。イヤ。ヤ。こ。こ。入。ら。色。移。入。し。じ。も。美。い。と。た
 う。う。さ。う。ご。ご。う。け。う。う。固。く。と。あ。り。き。あ。つ。て。旅。芝。居
 とも。は。ら。ん。ご。が。あ。き。も。種。ぐ。ま。吉。例。が。あ。つ。く。そ。ま。ご。ふ
 定。式。の。あ。つ。ら。の。さ。子。ま。の。大。伴。の。人。が。知。居。る。固。く。と。い。う。
 小。田。原。が。定。芝。居。で。桐。尾。上。と。り。入。坐。え。さ。女。哥。舞。妓。の
 家。筋。う。ら。ま。ご。ぬ。が。朝。を。め。く。番。立。が。淋。む。と。坐。え。の
 尾。上。が。烏。帽。子。水。干。で。舞。臺。入。坐。る。の。さ。泥。地。女。子。女。さ。

田舎草子

上

中野の狐も小持て。哥辞伎の濫觴。桐尾よ左の由来と
 長くといふが。とんご古風なりのさ。立て確のろま。何さ。
 坐して居てさ。徳でも視へる。イマ。徳では。何ら
 邪巫女が神おろしとするやうな。例さ。甲列の亀を。と氣
 坐うらと。と。大東の櫓名代。大概。知く。昇る。あれど。
 故あつて。愛ぢや。云の。秘へ。あう。大伴操。坐さ
 こそど。今での。哥辞伎。坐の。松ふ。なる。こころ。人も。あひ。何
 う。お。辞。伎。坐の。氣。で。あつ。の。さ。鏡。ま。さ。も。操。坐。で。

梅本妻を。坐さ。とも。い。戸。う。お。辞。伎。が。け。け。べ。その
 坐を。借く。ま。この。もの。さ。函。本。と。操。を。う。り。で。い。戸。う
 け。く。お。辞。伎。へ。つ。村。とり。の。更。別。小。屋。と。う。け。て。お
 中。と。奥。の。の。の。ま。上。の。金。邊。外。房。の。わ。さ。り。で。い
 何の。狂。言。と。して。も。大。切。小。張。紙。の。赤。鬼。と。あ。ま。の。見。物
 が見。物。が。あ。ら。べ。い。の。う。ご。一。体。が。新。場。小。田。本。町。へ。魚
 舟。を。送。る。濱。方。ど。う。う。氣。が。大。き。く。て。後。づ。く。ひ。が。あ。い。と

きてゐるわんで、四貫かゝり紙校へ積んで置て酒を
 穿つて中々草子と穿つて中々。後者紙呼で後で紙
 中りあさし見へ肩とさきるべしと云ながら、後の二本も
 穿つて。あつて二百と百とあるが。このり紙
 紙とぶつてとりの中を定ふをじうくの上総の
 本納大細とりの名さし瀧方へ先達く使申し。か
 折しも十月のりで。江戸く旗芝居が来て日蓮記
 とあるこの日蓮さるふたる後者の園方です。

ながせとりふ日蓮さるで舞臺へあつと教珠を
 して紙む中々何中々お賽銭が降る中々。十二か凝かこ
 中々お宗音と中々。老のりふおよおと娘共中々
 十二綱成の五文と文づをらりくと扱る。たんで日蓮
 さるる道くく舞臺へけく中々。目の字云やと中々。
 其後日蓮おさる後者の徳さふたる中々。そこど
 園方とさふおつてと坐頭の立役が動て賽銭の紙
 割けることもある。かおめがさるる中々の通り。田舎草子

穀屋引と云て。悪人教と云ましく。役と為て二人と人

び。穀屋之者。り。す。り。や。り。田舎者。是。居。の。役。者。也。又。下。坐。の。人。と。い。ふ。の。と。す。り。の。家。か。り。も。て。田。舎。者。は。居。屋。無。り。す。る。

あ。の。催。直。八。と。い。ふ。と。い。う。と。同。村。の。者。と。も。あ。り。て。世。傳。さ。る。ゆ。え。い。ふ。の。魚。釣。り。の。八。と。い。ふ。が。其。居。る。れ。ど。も。損。亡。あり。て。其。笑。止。なり。且。の。怨。ま。の。り。も。あ。り。す。

新。用。多。く。し。の。氣。の。毒。な。り。あ。り。て。あ。り。て。加。勢。さ。る。ゆ。え。あ。り。て。村。中。家。別。に。穀。屋。と。い。ふ。也。た。と。い。ふ。役。者。へ。は。赤。赤。と。い。ふ。二。人。の。誰。某。が。家。へ。進。出。又。津。瑞。理。と。い。ふ。

之。強。の。何。が。の。家。へ。進。出。と。い。ふ。其。細。く。と。い。ふ。け。て。五。三。人。が。を。り。て。く。る。と。い。ふ。其。君。和。目。の。り。舞。船。の。日。教。と。い。ふ。も。其。家。へ。進。出。お。く。これ。と。穀。屋。と。い。ふ。

其。の。時。日。進。出。さ。る。の。お。ま。の。お。ま。か。か。か。と。彼。が。か。か。と。穀。屋。引。

が。奪。合。と。い。ふ。大。息。と。い。ふ。日。進。出。さ。る。が。穀。屋。引。居。る。内。の。味。小。

あり。ご。ご。ご。お。よ。し。さ。る。の。由。利。益。い。と。い。ふ。宗。宗。の。面。目。

け。お。役。者。も。上。行。菩。薩。の。法。再。延。で。い。な。い。ま。ど。題。同。痛。

と。い。ふ。中。に。汁。粉。候。の。境。幸。い。の。瓜。振。ま。い。や。る。毎。時。作。是。

念。以。何。令。衆。生。得。入。無。上。道。即。成。就。佛。身。南。無。妙。法。蓮。

華。經。た。と。い。ふ。地。を。と。り。ま。い。ち。あり。ご。迷。惑。の。り。穀。屋。引。

の。り。間。魚。類。を。食。入。と。い。ふ。な。り。其。狂。言。中。の。常。不。精。進。

潔。齋。と。い。ふ。ナ。シ。ト。大。日。と。い。ふ。ち。や。孫。入。家。小。又。い。ふ。と。い。ふ。

る。が。あり。や。と。彼。日。進。出。さ。る。あ。の。大。敵。役。の。東。條。左。衛。門。と。

ら。が。ある。け。役。と。別。と。い。ふ。者。が。迷。惑。さ。る。ゆ。え。の。穀。屋。引。

ぐらう。辞書での悪人めざらうこぼしてまきまどろ拍と
 食ふぞこいふ真言寺とたのんでお寺と穀屋ふさる
 のさ。其のりまゐるなげとらふ。東條を傍門の真言宗ゆゑ
 真言寺ふとめる。け行程が一里もあるふ。朝晩通ふ
 のごうらやまふ疑深さ。一越後の新深の白山
 権現の社地で夜芝居がありま。於て昼夜芝居と
 りふ。昼芝居ふ千本とくつめる内ふ夜の役割が撥つ
 て晩の盛衰記。あまの役のゆゑに三役。ラット、ト、ト、と

をう。夜ふかるとまふ其役とけりけとま。其時馴を
 め役者が一寸あつりませうとらふと旗役者の立ち者さ
 へ。ナニサあつりまごとは。あまのちうらごのちうらま
 なるさ。いふいふでもま。ハテおまも竹の竹がといふ
 こと。津の役者えでいふ。あまは肉とりまのまのま
 といふ。あまのちうらま。又あまの芝居の大切悪人と退治
 しててふね合へ。あまのツサ。まづ芝居をとる。四段目
 寺子屋の幕が切ると。松王が小めらうとくつ時平を

志をりあげて出て来る。本舞臺へ来ると源義経はこゝに
たがらう時平を戸口より授けむ。源義経がうけとらてうぬ
時平ちとめつけける。皆何事もこらうらう怒つて事と
二人一とポンと貫筋斬る。悪人さびてめでさくときり
うけおまの今自らは眼ドロンくとを移る。さうあるものもある
のさ。全体田舎の人から出ると義経が望みうらうと怒り
田舎芝居は一日の程の末小附り狂言とらふりのぶ
たうてゑる。義経志をせん。所り狂言とら津堀理をつけて

不化と一幕いせるのさ。たとへばひらうま盛衰記大序より
四の切せでしる。或この切せでして。附り積急雪圍廓と
ゆゑ豊後ぶとをいせる。是が田舎芝居の
定式として十日芝居ならう。九日目の忠臣蔵とするが
お宝中りス奥の筋でん。南部の芝居も能芝居と。こゝにも
見出しの改人が来ると。楽屋うら居合抜の形小振と役者が
出て。ヤットウの志あるおと号して居合をねくおねとさる
のどく茶臺の侍。たりおと。又お羽小二人芝居とらうら。

り。あの幕斗まくぶたうとてみてもなく、さうもつちやま
 内)のでもござるまさる。地獄極楽ぢごくごくらくの漆幕しやくまくイヤかるおどりの
 おひついでござるゆきも。則すなはちこれが狂言綺語きやうぎごのたのしみ
 續つづ佛乗ぶつじやうの因縁いんげんと申まをでござるゆきも。計あは一生いっしやうの深度ふかども
 ありましてあつらう。執着しやくしやくの一念いっせんののちり五逆ごぎやく十悪じゅうあくをいほ
 りてあつらのゆきでござるゆきも。一念いっせんのおつらざる時ときの素もとより
 煩悩ぼんごうもあつらう。煩悩ぼんごうもあつらう物ものづら師直しちゆうもあつらうゆ
 かりおきも。劫平けつへいもあつらう迷まよりごと。こまれば本心ほんしん自みづから

常住じやうじゆうも佛性ぶつじやうでござる忘念しやうねんへ念ねんの体たい無念むねんへ佛ぶつ井いの
 体たいでござる。師直しちゆうが一念いっせんのあつらざれば判官はんくわんの家滅けがめつ亡なも
 いさね。師直しちゆう佛ぶつの体たいでござれば判官はんくわん切きけりとも
 刃やいば段段だんだん壞くわいの利益りやくがござる。親おん善ぜん善ぜん堆たいも速すみふお救きうひ
 まさるねでござる。女人にょなんのまら物ものをみる。たぬあたぬあの五百生ごひやくじやう
 がその向むかひ。おなまき者ものおしめるとまら。お院いんささとてい
 ちのうさ。まらまら劫平けつへい等らが所業しよごうと申まをののり。まら
 物ものをみる。あつらう。主人しゆじんあつら不忠ふちゆう親おんあつら不孝ふきやうその

よふあつるが古々まで呻吟ありき。餓鬼の物を干柴が
 せびるとやうで。貧窮なるは一兵流る食物と若者の
 身とて貪りの食ふ是等のいとと解ゆも論ゆもあま
 をねでござせん。あつて五百生でせと申すと思へば
 億万劫と経るとももうむ淋さうゆふ。さきばうやう
 なる罪障のよつて生死の流轉しく六道のあつる竟
 地獄の隨在して未来永劫沈没のとき。そも、八大
 地獄とやとるの涅槃経のこごりありき。一、火の等活

地獄。こまのつと一兵流る。狸の角き流る。あつる強ハ
 種かまのつとどつと猪猿と赤教しとる殺生の人
 五百輩あつて。二つあつる黒繩地獄。これの空九郎がやうな
 偷盗の人一千輩あつて。三つあつる衆合地獄。こまの
 師直まどろつとて邪淫の人二千輩あつて。四つ
 あつる叫喚地獄。こまの九郎がやうな竹本花等のたぐひの妄語
 の人四千輩あつて。五つあつる大叫喚。こまの七づん目の
 由良がやうな飲酒の人八千輩あつて。さうふ。ハア、

よーままだいあやうふ一ツくやてめううは退屈ぐんべい
 危角をの貪嗔癡の三毒身口意の三業をとめて
 慈悲善根につくまてへこんでござりめと阿彌陀如
 来ありがごふの佛法の妙不可言の妙なき煩
 悩す。おむべき菩提す。これを即成佛とらぬ唯心の
 浄土已心の弥陀ちよつて。さうござりこんでござりめと
 和尚のく又我身斗佛法を行じて他人さ勤めござるが
 佛法却てせむくある也。人をもとめり我も此道とま

りなうり。ト言ふのつてまや
 小人の主ふうつて。いゝもあるやうくの後生菩提を
 ろふうけて。それくの法縁ふまを。名号ととた人の中を。
 さもやふ彼岸ふらうるは。ひまもさうふをげけのん。
 南無あま肉とされ酒方あまご如来さまやふ
 さういゝとせめひ。上品上生の蓮華ふらうるのやうく。
 安養淨刹ふまうののさうらうのよ親見す。いゝ
 可也の夫婦眷属あもあひて樂を極め。余は無量壽

あ〜〜〜〜〜お尻さ〜〜〜「あ〜〜〜〜現當
 兩益「あ〜〜〜往生極樂「あ〜〜〜「あ〜〜〜
 あ〜〜〜「あ〜〜〜。肉「あ〜〜〜。ついでに
 きて十念のう〜〜〜「あ〜〜〜。肉「あ〜〜〜。ついでに
 芝居さんお〜〜。お十念さん〜〜〜ちよも。ま〜〜〜佛縁
 のう〜〜〜でござりやま。別て〜〜〜娘も〜〜〜も又聴
 聞の〜〜〜なうござりやま。潮来節〜〜〜の甚九郎の。
 びう。第川崎〜〜。あ〜文新肉〜〜〜た〜〜〜が〜〜

あ〜〜〜〜「あ〜〜〜。肉「あ〜〜〜。ついでに
 よ〜〜〜「あ〜〜〜。肉「あ〜〜〜。ついでに
 上接〜〜〜「あ〜〜〜。肉「あ〜〜〜。ついでに
 和尙さん。地獄極樂の幕の清釈〜〜〜を〜〜〜して後
 びう。うらも傍の〜〜〜も膝下が〜〜〜を〜〜〜して
 う〜〜〜。遠く〜〜〜。誰が〜〜〜の〜〜〜。法者
 ま〜〜〜。後皮〜〜〜。川の〜〜〜。八本内〜〜〜。又
 例の〜〜〜。さ〜〜〜。あ〜〜〜。あ〜〜〜。あ〜〜〜。

